

幼子イエス

クリスマス、おめでとうございます。金曜がクリスマスイブで、クリスマスの夕べには教会に来ておられる方々がご家族や友人を誘って来てくださり、とても嬉しいひとときとなりました。そして昨日がクリスマス、土曜日ということもあって朝方の通勤時間帯、せわしい自動車の音もせず、疲れもあったのか珍しく朝寝坊をしてしまいました。うちは夜中から朝方にかけて2度ほど猫が起こしにくるものですから朝まで安眠ということはないのですね。起こされて布団の中でつらつらとこの2年のコロナ下のこと、そして今日とりつぐ御言葉のことを重ね合わせてあれこれと考えているうちに眠りに落ちて、寝坊をしたような次第です。

さて今日が26日ですから、もう2022年まで1週間もありません。年内最後の礼拝を、わたしたちは捧げています。降誕節第一主日の礼拝です。先週は待降節第4主日でした。降誕を待ち望むアドベントから数えて4週目の礼拝、そして昨日が降誕日でしたので、今日から受難節が始まるまでわたしたちは降誕節第1主日、第二主日、第三主日と今度は時を数えてゆくことになります。このように教会暦では先週と今週と時間のかぞえかたを変えているわけですが、どうでしょうか。先週のみなさんと今週のみなさんと何か変化がありましたか。おそらく実感としては変わっていないと思われるのではないのでしょうか。わたしのなかで流れている時間の連続性、継続中の課題、心配事、担わなければならない問題、それが先週と今週と、クリスマスを境いに何かが変わったのだろうか。主イエスが生まれた。あなたがたのために救い主がお生まれになった。2021年目のクリスマスを迎えて何が変わったのだろうか。そのように問いか

けてみることは大切なことだと思います。そのようにして、神の言葉がわたしたちのあいだに、わたしたちの経験する現実の中に実体として働きかける。つまり聖霊によってマリアが身籠ったように、受胎するきっかけとなる。これをキリスト教のことばでは「受肉」といいますが、実を結び始める。そういうプロセスのなかにわたしたちはいるのです。すこし矛盾することを言うようですが、実は先週と今週の違いをわたしが感覚的に捉えられるかどうかはあまり関係がないのです。それによって、主は来ませり、来て下さったという神の側の真実、到来の出来事がなかったことにはならないからです。すでにキリストは来ておられ、今も働いておられる。教会が告知するのは、あなたがたの現実の只中にキリストはすでに来ておられ、あなたがたに働きかけ、あなたの生きる現実には主に支えられて変化し始めているのだというメッセージなのです。わたしたちの側の「分かる、分からない」で神の出来事が変化するなら、それは救いではありません。一方的な、神さまの先行する恵みによって、わたしたちの生きる暗闇の中に、光が差し込んでいる。夜明けは近づいている。ただそれを捉える信仰の目が慣れていない、そういうことだとわたしは考えています。

そして今朝、わたしたちに与えられているシメオンとアンナというふたりの年老いた信仰者を通して示されるのが、まさにこのクリスマスの出来事、既に始まっている神の恵みの出来事を捉えて喜ぶ、安堵する。自分を取り巻く現実が、キリスト・イエスと出会ったことによって決定的な変化、もっと言ってしまえば神の勝利の出来事のなかに移し替えられ、新しい現実を生き始めているのだということを見て取った証言となっているのです。このふたりは敬虔な人物であったと記されていることから信仰において練達の人物であったわけですが、「聖霊に

導かれて」とありますように、神さまの働きかけによって、ふたりは、生後まもなく、まだ自分からは何か語ったり、行ったりすることは出来ない幼子イエスを見て、そのなかに神の、イスラエルの民に対する限りない憐れみと慈しみからなる救いを見て取って、感謝が溢れ出した。そのような美しい光景を、福音書記者ルカは記したのです。シメオンについての記載は、「エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なないというお告げを聖霊から受けていた」と記されています。そのシメオンが神殿に初子をささげるために宮詣でにきたヨセフとマリアの前で、生後まもない幼子イエスを見て讚美を始めるのです。

「主よ、今こそあなたはお言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」と歌うのです。このクリスマスだけでザカリアの讚歌、マリアの讚歌、シメオンの讚歌とルカはみつつの美しい讚美を残してくれています。わたしは、このザカリアの讚歌が記された幼子イエスの神殿奉獻の箇所がクリスマスの記事の中ではいちばん好きな箇所になりました。それはたぶんわたし自身が年を取ってきたということ、また教会の兄弟姉妹を御国に送る地上の最後の務めを担わせて頂いてきたことから自然とこの御言葉が心に残り、約束の言葉として、わたしを支えてくれているのだらうと考えています。お気づきになっていると思いますが、この出来事は神殿、これは神の宮ですから、教会におきかえて考えてよいのですが、そこにシメオンとアンナ、ヨセフとマリア、そ

して幼子イエスと、みつつの世代が相い集っているのです。シメオンとアンナは夫婦ではありませんが、そこがまたよいですね。教会と同じ、主にある兄弟姉妹です。老年期を迎えたシメオンとアンナは彼ら自身の世代の課題を生きています。それは死を迎えるということです。ただ現状のイスラエルについて、信仰の篤い者であればあるほど心を痛めていたでしょう。ヨセフとマリアはいま壮年期を生き始めており、与えられたイエスの養育を始め、社会に対して責任をおって働く課題を与えられています。そして彼らに抱かれた幼子イエスは幼少年期、神と両親の手の中で育ってゆく。幼子は成長する種のようなもので、その中には未来が秘められているのです。この三世代が神殿に集い、幼子イエスをシメオンが抱き上げ、次世代を生き抜こうとしているヨセフとマリアの前で、神の救いを賛美する。アンナもそれに祝福を添える。そして覚悟をも与えています。この構図が素晴らしいですね。シメオンは感極まって「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです」と讚美しました。これがクリスマスに神から贈られた恵みを正しく受け止めた応答なのです。ああ、もう安心だ。そう言って安らかに去ることの出来る死、それは「死」という言葉でもはや表現するのではなく、覚めることを前提とした「眠り」であることが、キリストの十字架の死と復活によって明らかになります。イエスとは「主は救い」という意味の名前ですから、シメオンは幼子イエスを腕に抱いて、そこに神の救いの約束の実現を信仰において見て取っているのです。ああ、もう事はなったのだ。神は約束を守り、イスラエルに救いを贈られたのだ。わたしは今、その約束を腕に抱いているのだ。それを喜びに溢れて老人は歌った。アンナもそれに加わるかたちで、ふたりの、信仰に

生かされてきた者たちが、その生涯の最後に、神の真実を褒め、感謝している。自分が生涯をかけて依り頼んで来た神の救いを見て取って喜ぶ。このシメオンの喜びを、わたし自身も受け止め、安らかに去らせてくださるという感謝の讃美を共にしたいと願っているのです。大事なポイントは、「お言葉どおり、安らかに去らせてくださる」とあるように、神のお言葉に従って生かされてきたという事実があります。お言葉リレーという言い方はおかしいかもしれませんが、じつは福音書記者ルカは、彼のクリスマスの出来事を語るのに、神の御言葉をそれぞれがどう聴いたかということに焦点をおいて物語ってきたのです。ザカリアに洗礼者ヨハネの誕生が告げられる。しかし、彼はお言葉をはじめ信じる事が出来ずに、ことが実現するまで口が利けなくなる。マリアは受胎告知をうけて「お言葉どおり、この身になりますように」と応答する。エリザベトはマリアの訪問を受けて「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう」と賛美する。そして、羊飼いたちは天使から告げられた主イエスの誕生を急いで確かめにゆく。そして天使の告げたとおりであったことを確かめ、神をあがめ、讃美しながら帰ってゆきます。そして今、シメオンも幼子イエスを腕に抱き、「お言葉どおり」去らせて下さると感謝している。それぞれのエピソードはいずれも、お団子をつらぬく串のように、神の言葉を中心としています。お言葉に賭けて生きてきた者、生きようと志す者を神の業が刺し貫いている。だから、彼らの人生は主に支えられて一貫性を保っているのです。そこにあるのは神の言葉は出来事となる。神の約束は必ずなるという信頼です。幼子イエスは、シメオンにとって、神の慈しみそのものです。すべての者の未来を神ご自身がこの幼子に委ねていることを見て取り、ああ、もう安心だ。何も憂えることはな

い。そう満足して、満ち足りて世を去ろうとしている。キリストに出会う者は、そこにみずからの終わりを見るのが許されるのです。この方の十字架が、わたしの罪を贖い、神さまとのあいだに命の道を回復してくださったがゆえに、わたしたちは神を父と呼ぶことを許され、罪と死の支配から、神の恵みのご支配の中に移されている。もう何も恐れることはない。シメオンが見て取り、感謝している出来事は、やがてすべての民のために整えられた救いとなり、慰めとなるだろうという新たな希望の証言となっています。幼子イエスは、わたしたちの未来となってくださっている。まだ来ていないわたしの終わりの守りとなり、同伴者となる神の救いであることが証言されている。老人から、親となったばかりのヨセフとマリアの世代へ。それは次の世代へ、次の世代へと受け継がれてゆく信仰の遺産、神の救いそのものであり、その真実が飼い葉桶に宿るキリストとして今年もわたしたちのところに来て下さったのです。この喜びを、わたしたちは世界に告げたのです。そして、このお言葉を出来事としてくださる神を支えとして、インマヌエル、神が共におられる新しい年へと送り出されてゆくのです。

お祈りいたします。